

Title	幼少期のミハイル・チェーホフにおける演劇性
Author(s)	西田, 容子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 55-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57339
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

幼少期のミハイル・チェーホフにおける演劇性

西田 容子

1. はじめに

1.1 研究の目的と背景

本稿で取り上げるミハイル・アレクサンドロヴィッチ・チェーホフ(1891-1955)¹は、20世紀前半に、ロシアのモスクワで演劇活動を行っていた俳優である。彼は、ロシアの文豪であるアントン・チェーホフの甥であり、ロシア演劇の祖ともいべきスタニスラフスキーの直弟子でもあった。俳優としてだけでなく、教育者としても高く評価されており、現在でもロシア、アメリカ、デンマークを中心として、チェーホフの理論に即したワークショップが定期的に行われている。デンマークに拠点を置く、チェーホフ・シアターでは、本国ロシアから演劇講師を招き、チェーホフが書き残したエチュードを用いて演劇活動が行われているほか、チェーホフが興味を持っていたとされる、オーストリアの神智学者、シュタイナーが考案したオイリュトミー理論をふまえながら、チェーホフのメソッド研究をするなど、多角的にチェーホフを理解しようという試みが進められている。本国ロシアでは、ミハイル・チェーホフ・センターが発足され、演劇人、演劇研究者が中心となり、チェーホフのメソッド保存活動が続けられている。近年では、生誕120年を記念して伝記映画が作られたほか、英語のみの出版であった著書²もロシア語に翻訳されるなど、再びチェーホフに注目が戻ってきているといえる。

しかし、こうしたチェーホフに対する関心の高さは欧米が主であり、日本ではその名はほとんど知られていない。ミハイル・チェーホフについて日本語で読める資料は、非常に限られており、1991年に発行されたゼン・ヒラノ翻訳の『演技者へ』³、2007年に執筆された堀江の論文⁴がほぼ唯一の手がかりである。その他にも、スタニスラフスキーやメイエルホリドといったロシアの演劇人に関する文献の中で名前を出すことはあるが、何年にとどの劇に出演したなど、表面的な情報しか得ることができないのが現状である。とはいえ、日本で知られていないからといって、彼が注目に値しない人物であったというわけでは決

¹ 以後、“チェーホフ”と表記されたものは全て、ミハイル・チェーホフを指すものとする。

² Michael Chekhov *Lessons for the professional actor* Performing Arts Journal Publications N.Y. 1985.

³ マイケル・チェーホフ『演技者へ! 一人間、想像、表現』ゼン・ヒラノ訳、晩生書房、1991年。

⁴ 堀江新二「個人的個性(ЛИЧНОСТЬ)・非個人的個性(ИНДИВИДУАЛЬНОСТЬ)と三つの意識 —スタニスラフスキーとミハイル・チェーホフの演技論」大阪外国語大学紀要『ロシア・東欧研究』第12号、2007年、pp.63-81。

してない。先に述べたとおり、ミハイル・チェーホフは、20世紀前半のロシア演劇界を代表する俳優の一人であり、演技トレーニングの教育者としても名高い人物である。同時代人から、「間違いなく才能にあふれ、魅力的な俳優である。将来ももっとも有望な一人」⁵と評され、「多大な才能を持った俳優でさえも、生涯を通じて2、3の当たり役を持つのが関の山だが、チェーホフの場合は演じた役全てが当たり役だった」⁶と賞賛されたミハイル・チェーホフを研究することは、そのメソッドが現代においても活用されている点から考えても、20世紀のロシア演劇をよりよく知るためだけでなく、現代の日本演劇にとっても有益なことであるといえる。

1.2 先行研究および本稿の位置づけ

ミハイル・チェーホフは、その活動場所を時代とともに変えてきたため、先行研究では、各地に散らばったチェーホフの記録を、それぞれの国の言葉を解する研究者が整理するところから始められている。彼の活動場所は、母国ロシアの他、ドイツ、フランス、ラトビア、リトアニア、イギリス、アメリカと多岐にわたっている。この内、ロシアとアメリカ以外の国は、滞在期間が短かったこともあってか、主に“ヨーロッパ時代”とまとめて論じられることが多い。また、ロシアがソ連になり、国外から資料を手に入れ辛くなったことも重なってか、先行研究は、ロシア(ソ連)時代とヨーロッパ・アメリカ時代の2つに区分される傾向にある。ロシア時代の演劇活動の研究として代表されるのは、クネーベリ(Кнебель, 1967)、グローモフ(Громов, 1970)、キリーロフ(Киллиров, 1992)である。

クネーベリは、チェーホフの直弟子にあたる人物であり、自身も女優・演出家として活動した。1917年に開設されたチェーホフの私設スタジオの生徒でもあり、当時の出来事を、自身の体験やスタジオ生たちの回想録をもとに著述している。舞台上のチェーホフだけでなく、舞台を下りた、ただののり人としてのチェーホフを長年見つめて来た人物であり、チェーホフの演劇活動を知るためだけでなく、彼の人柄を知るうえでも貴重な資料を残している。

グローモフもクネーベリと同じく、チェーホフ・スタジオの出身者であり、後に第二モスクワ芸術座で活躍した俳優である。彼は、ロシア国内でチェーホフが演じた役のうち、フレスタコフ役やハムレット役など主なものを取り上げ、その演技がどのようなものであったのか、当時の観客にはどのように受け入れられたのかということについて、自身の記憶と当時の劇評をもとに考察した。後に、チェーホフがロシアを離れる際、グローモフは彼について、ヨーロッパを回っている。チェーホフとは、単なる同僚というよりは親友という間柄で、グローモフだからこそ記録できた出来事も少なくないという点から、注目し得る人物である。

キリーロフは、現代を生きる演劇研究者であり、グローモフ同様、チェーホフの演じた

⁵ Виноградская, И.Н. 1971. С. 362.

⁶ Бабочкин, Б.А. 1968. С. 21.

役を対象としている。グローモフが主な役しか扱っていないのに対し、キリーロフは、チェーホフの演劇学校時代の端役に至るまで研究対象としている。キリーロフは、チェーホフの演技には、何か観客を巻き込む魅力のようなものがあつたと主張しており、それぞれの役の劇評からチェーホフの演技の独自性の分析を試みている。

ヨーロッパ・アメリカ時代の演劇活動の先行研究としては、ブラック(Black, アメリカ, 1987)とビュックリング(Бюклинг, フィンランド, 2000)が挙げられる。ブラックはロシア語を解さないため、チェーホフの母語で書かれた資料にあたれないという弱点はあるが、これまでロシア人研究者たちが手に入れられなかった、アメリカ時代のチェーホフの資料を活用しており、研究に新たな風を吹き込んだといえる。主に、英語で刊行されたチェーホフの著作⁷、コロンビア大学古文書館に所蔵されているインタビュー音声資料とし、晩年におけるチェーホフの演技活動について論じている。中でも、チェーホフの肉声がおさめられたインタビュー・テープは貴重である。

ビュックリングは、チェーホフ自身の著作、手紙、同時代人のインタビューをもとに、チェーホフの演劇活動の過程を明らかにした。母国ロシアを離れ、スタニスラフスキーとモスクワ芸術座という後ろ盾をなくしたチェーホフが、誰にどのように精神的、物質的に助けられ、演劇活動を継続していったかが詳細に述べられており、ヨーロッパおよびアメリカでのチェーホフの演劇活動を知る数少ない貴重な資料となっている。

これらの先行研究により、近年では今まで謎とされてきたチェーホフのアメリカ時代を含め、彼の主だった演劇活動の詳細、人間関係が明らかになってきている。先攻研究では、あくまで“演劇人”であるミハイル・チェーホフが研究対象とされており、人物としての彼には焦点をあてられていない。しかし、舞台芸術というジャンルが、自身の精神と肉体を用いて表現する芸術である以上、俳優を研究対象にするにあたって、舞台以外での活動も視野にいれることは肝要である。特に、チェーホフの師であったスタニスラフスキーは、俳優自身の人としてのあり方と舞台との関係を重視した人物であり、その点からも、舞台人としてではない、一人の人間としてのチェーホフを知ることは必要不可欠であると考えられる。本稿では、俳優としてではなく、人間としてチェーホフがどのような人物であったかを探るため、彼の幼少期に焦点をあてる。三つ子の魂百までというように、幼少期に培われたものは、自分でも驚くほど、後々の価値観に影響を与えるものである。本稿では、ミハイル・チェーホフがどのような家庭環境で育ち、どのような子ども時代を送ったのか、単なる史実だけではなく、チェーホフ自身がどのように自分の幼年時代を受け止めていたかということを論の中心としたい。そのため、利用する資料は、チェーホフ自身の回想記を主なものとする。繰り返すが、本稿の中心となるのは、チェーホフの幼少期における客

⁷ Chekhov, M. A. (1953) *To the actor*, Harper & Row, New York.

観的な事実ではない。本稿での課題は、チェーホフの主観的な“過去”を彼の言説から明らかにすること、チェーホフがどのようなセルフイメージ、周囲へのイメージとともに成長していったかを明らかにすることである。最終章では、その“過去”が、プロの俳優になってからのチェーホフの演劇活動に、どのように組み込まれて行ったかということ考察したい。

2. チェーホフの育った家庭環境

2.1 父親 アレクサンドル・パーヴロヴィッチ・チェーホフ

まずは、チェーホフの育った家庭環境について述べたい。チェーホフは、父アレクサンドル・チェーホフと母ナターリヤ・ゴリデンの間に生まれた。父であるアレクサンドルは、作家のアントン・チェーホフの長兄であり、自身も執筆活動を生業としていた。アレクサンドルは、弟のアントンとは違い、小説ではなく、哲学や文学理論などの論文を執筆し、新聞などに掲載していた。アントン曰く、アレクサンドルは非常に頭が良く、有能な人間であった。彼は、アレクサンドルについて「アレクサンドルは、私よりもはるかに才能がある。しかし、その才能を生かして何かを成し遂げることはないだろう」⁸という言葉を残している。アントンの言葉通り、アレクサンドルは才能に恵まれたが、その才能を生かすことはできなかった。アレクサンドルには精神的に安定しないところがあり、癩癩を起こし怒鳴り散らしたり、アルコールを過度に接種したりという生活をおくっていた。また、「ヤルタに行ってくる」といった簡素な置き手紙一つを残し、家を留守にするということも少なくなかった。旅立つとき、アレクサンドルはほとんど荷物を持って行かなかった。コートを肩にひっかけ、カメラと数枚の下着、そして杖だけを持って行くのが常だった。それだけ身軽に出て行くので、家族にとっても、アレクサンドルの旅立ちは予測がつかず、置き手紙を発見して初めて、彼が遠くに旅立ったことを知るといった具合だった。

家族にとってだけでなく、近所の人の目から見ても、アレクサンドルは風変わりな人物だった。彼は、町のごろつきとつるんで酒を飲み歩いたり、浮浪者を自宅に招き入れ、台所に住ませたりした。執筆を生業にするという文化的な一面を持ちつつも、アレクサンドルの話し方は決して丁寧ではなく、父親の言葉遣いを真似したチェーホフが、学校でよく赤っ恥をかいていたという⁹。このように自由奔放なアレクサンドルであったが、子育てにおいても、その性格は惜しみなく発揮された。まだ幼いチェーホフを理由なしに怒鳴ったり、何時間も意味なく座らせたり、その一風変わった“しつけ”は挙げると切りがない。父親の理不尽な態度に、幼いチェーホフは当然、彼のことを恐れるようになった。外見的にも、アレクサンドルは眼光が鋭く、声も大きかった。身長も高く、がっちりした体格であったため、チェーホフは、父の内面だけでなく見た目も恐怖の対象であったと回想録に

⁸ Чехов, М. А. 1995, Т. 1. С.39.

⁹ 父アレクサンドルは、言葉遣いが丁寧ではなく、わいせつな物言いもよくしていた。そのため、子どもだったミハイルが父の言葉遣いを真似すると、周りの大人たちは驚いたという。

記している¹⁰。誰もが人生に一度は考えることだが、チャーホフも自分の父親に対して、以下のような厳しい評価を下している。「父を前にすると、震えおののき、驚嘆し、恐れはしたが、一度も好意を覚えることはなかった¹¹。」「墓を参ったのは一度きりだった。(中略)もう二度と墓参りはしないつもりだ¹¹。」これらの記述から、チャーホフが手放しに父を好いていたわけではなかったことがうかがえる。また「一年に何度か、好きなだけ演じても良い幸福な時が訪れた。それは、父が不在の時だった」¹²という記述からもわかるように、父親はチャーホフにとって恐怖の対象、むしろ存在しない時の方が平穏だと思わせるようなところがあったといえる。

もちろん、チャーホフは、父を恐れるだけでなく敬愛もしていた。アレクサンドルは博識で、幼いチャーホフにも理解できるよう、哲学や天文学といった学問を噛み砕いて教えてくれた。父から夜ごと、惑星の動きや構造について教えてもらったり、十二宮について教えてもらった様子、チャーホフは嬉しそうに回想している¹³。博識なアレクサンドルの影響を受け、成人してからのチャーホフは、ニーチェ、ショーペンハウアーといった哲学書をよく読むようになった。また、アレクサンドルには諷刺画を描く才能もあり、チャーホフは、父の真似をして、自身も似顔絵を描くようになった。チャーホフの描く似顔絵は、自然主義的ではなく、何か一つの目立つ特徴を際立たせたデフォルメ画のようなもので、この手法は演技の役作り、また舞台上での即興をする際に、大いに功を奏した。哲学や世の中の物事に対する興味、諷刺画の描き方など、アレクサンドルから教わったことはチャーホフの中で息づき、将来の職業の助けとなった。

2.2 母親—ナターリヤ・ゴリデン

母のナターリヤは、チャーホフにとって優しい母であり、守るべき存在であった。ナターリヤは、心の優しい繊細な女性で、夫のアレクサンドルの傍若無人ぶりにも、何も言わず、じっと耐えているような妻だった。アルコール中毒におかされていたアレクサンドルが痛癢をおこし、ビールを買ってくるよう頼む時も、ナターリヤは文句一つ言わず買いに行っていたという¹⁴。チャーホフは、アレクサンドルの影響を受け、かなり若い時からアルコールを摂取していた。量も相当のものであったらしく、母親がいつも心配していたと回想している¹⁵。しかし、アルコール摂取に関して、母親からとがめられたというような記述はない。夫の飲酒についても、責めたり、禁酒するよう説得したりするようなことはなかったというから、基本的にも静かで口答えをしないような、おとなしい性格の女性であったことが想像できる。

¹⁰ Чехов, М. А. 1995, Т. 1. С. 36.

¹¹ Громов, В. А. 1970. С.7.

¹² Чехов, М. А. 1995. Т. 1. С. 37.

¹³ Там же. С. 39.

¹⁴ Там же. С. 38.

¹⁵ Там же. С. 20.

優しい母であるナターリヤを、チェーホフは常に気遣っていた。ナターリヤとチェーホフは非常に仲のよい母子で、チェーホフの手紙や回想録の中には母親の話題がよく出てくる。チェーホフは、自分の母親のことを“誠実な友人”と呼び、母親との間には何も隠し事がなかったと書き遺している¹⁶。喜びも哀しみも、成功も失敗も、母親にだけは、チェーホフはすべて正直に話すことができた。彼にとって、それだけ母親の存在はかけがえのないものだったということである。私生活だけでなく俳優としての活動においても、母ナターリヤはチェーホフを支えていた。彼女は、チェーホフの演技について、具体的な助言はしなかったが、ナターリヤの感想を聞いて、チェーホフは自分の演技を改善していった。これは、幼少期のお遊びのような演劇時代から始まり、プロになった後も、母が亡くなるまで続いたことである。「母の協力なしに、作られた役は一つとしてない」¹⁷というチェーホフ自身の言葉から、彼にとっての母親の存在の大きさが読み取れる。

このように、チェーホフにとって、母親ナターリヤ・ゴリデンは絶対的な存在であった。生まれ故郷のペテルブルグを離れ、モスクワで一人暮らしを始めた時も、毎日、多い日には1日に2回、チェーホフは母親に手紙を書いた。その後、モスクワで成功し、30代を迎えたチェーホフが精神的な問題を抱えた時、彼は母親が死ぬのではないかという妄想にとりつかれるようになる。全く根拠のない妄想であったが、チェーホフの中で母親が死ぬかもしれないという恐怖は日に日に大きくなり、彼を蝕むようになっていった。このような妄想も、母親を大切に思うがゆえ、最も大きなよりどころとしていたがゆえと考えられる。回想録にも、父親に対する記述が少ないのに対し、母親に関する記述は、幼少期だけに限らず成人してからも多く残されている。父親に放浪癖があり、家に不在がちであったため、チェーホフにとっては母一人子一人のような人生だったのかもしれない。「父には他に2人の子ども¹⁸がいたが、母にとっては、私が唯一の息子だった」¹⁹という記述からもわかるとおり、母ナターリヤ・ゴリデンとチェーホフの母子関係は非常に密接なものだったといえる。

2.3 ミハイル・アレクサンドロヴィッチ・チェーホフの幼少期

放浪癖のあるアルコール中毒の父親、どこまでも心優しい母親がいる家庭で、チェーホフは育った。家庭環境のせいか元来の性格だったのか、チェーホフは少々気難しいところもあったが、基本的には素直な子どもだった。惚れっぽい性格で、いろんな女の子に夢中になり、その娘と結婚することを夢見た。女の子を見ると、やれ笑顔が素敵だ、やれ着ているワンピースの色が良いといったは、恋に落ちていた。ある時など、相手がほんの小さな女の子だったにもかかわらず、彼女のピアノを弾いている姿が魅力的だといって夢中になるほどだった。熱中しやすいのは、チェーホフの性だったのだろうか。彼は勉強熱心で

¹⁶ Чехов, М. А. 1995. Т. 1. С. 46.

¹⁷ Там же. С. 46.

¹⁸ アレクサンドルと前妻の間に生まれた2人の息子、ニコライとアントンのこと。

¹⁹ Чехов, М. А. 1995. Т. 1. С. 46.

もあり、ギムナジウムに入学した1年目のミハイルの通知表は、5段階評価のオール5だった。特に、フランス語は得意の科目であり、学校側から依頼を受け、同学年の子どもたちに教えていたほどである。その後、時とともに、チェーホフの興味は別のものに移っていった。彼が何よりも熱中したのは、母親や小間使いの前で物まねショーを披露することだった。この物まねショーは、子どものお遊び程度のもので演劇からはほど遠いものであったが、時とともにより本格的なものになっていった。

ショーは、幼いチェーホフにとっては、ほとんど唯一の演劇体験であった。後の舞台での活躍を考えると意外なことだが、幼少期のチェーホフには、両親が劇場に連れて行ってくれるといったような演劇経験はなかったという²⁰。よもや俳優になろうとは、本人を始め家族の誰も想像もしておらず、幼いチェーホフは大きくなったら消防士になりたいと夢見ていた。そんなチェーホフにとって、唯一の演劇体験であった自宅のバルコニーでの物まねショーは、決して質の高いものだったとは言えなかつただろう。それは、どちらかという、単なる子どものお遊びに近いものだった。しかし、最初のうちこそ、拙い物まねショーだったが、回数を重ねるごとに、チェーホフはそのレパートリーを増やし、見せ物としての完成度を高いものにしていく。父親や近所の人など、身近な人の物まねから始まり、最終的には、ガルブーノフやディケンズの戯曲を上演していたというから、その成長は驚くばかりである²¹。これらの戯曲が上演されるころには、観客は母親や小間使いだけでなく、噂を聞きつけた近所の人たちも見に来るようになっていた。やがて、噂が噂を呼び、チェーホフは近所のクラブで上演する機会を得る。このクラブでの上演が転機となったことは、「演劇好きの人たちが劇を見せるクラブがあり、そこで特に老人やヴォードビルを演じているうちに、演劇をやろうという思いがわいてきた」²²というチェーホフ自身の言葉からも確認できる。

自由奔放な父親、優しすぎる母親という、子どもにとってはやや頼りないともいえる家庭で、ミハイル・チェーホフは幼少期を過ごした。しかし、幼いチェーホフは、彼なりに自分の居場所を見つけ、熱中できるものを手に入れた。チェーホフの回想録からは、父親＝憎しみと尊敬の対象、母親＝愛を捧げる対象、演劇＝自分に幸福を与えてくれるもの、という単純な図式が読み取れるが、このイメージは、その後、どのように彼の演劇活動に結びついていったのだろうか。次章で確認する。

3. チェーホフが幼少期に学んだこと

ミハイル・アレクサンドロヴィッチ・チェーホフは、2つの大きな回想録を書き残している。一作目は『俳優の道』²³、二作目は『人生と出会い』²⁴である。一作目は、幼少期か

²⁰ Лидина, В. 1928. С.123.

²¹ Чехов, М. А. 1995. Т. 1. С. 43.

²² Там же. С. 124.

²³ Чехов, М.А. Путь актера // Чехов Михаил Александрович : Литературное наследие : В 2 т. М. Искусство. 1995. Т. 1.

らモスクワ芸術座での演劇活動までを、二作目は幼少期から晩年までについて書かれているが、両方の著作に共通することは、チェーホフの過去に対する姿勢が主観的であるということだ。言うまでもなく、これは自然なことである。自身の回想録を残そうとする時に、全く客観的に、脚色なしに事実だけを綴れる人間など存在するわけがない。興味深いのは、相反する感情および評価が、どちらも同じだけの熱を持って書かれている点にある。たとえば、父親に対するチェーホフの評価が例として挙げられる。不在がちで、愛する母に苦労をかけた父親に対するチェーホフの辛辣な評価は、回想録に多く見受けられる。先にも引用したとおり、「二度と父親の墓参りに行くつもりはない」といったような記述は、その最たるものであろう。しかし、それと同時に、父親はチェーホフにとって尊敬すべき対象であり、彼の才能や知識を誉め称える記述も少なくはない。一読した限りでは、結局、チェーホフは父アレクサンドルのことを好きだったのか嫌いだったのかわからないほどである。回想録を通読すると、父親に対する肯定的な評価も否定的な評価も、どちらも同じぐらいの情熱を持って書かれているのが読み取れる。つまり、チェーホフにとっては、どちらも等しく真実であり、父親は憎むべき存在であると同時に敬愛すべき存在であったということだ。大人からすれば、このように相反する感情が一人の人間の中に共存するという事は周知の事実であるが、幼い子どもにとっては、どれほど豊かな精神的体験になったことであろう。特に、肉親という、一般的には愛すべき対象とされている人物に憎しみの感情を覚えるという罪悪感、しかし、自分に対する言動を考えると憎まれて当然だとする自己防衛など、幼いチェーホフの中では、様々な感情がうごめいていたことが容易に想像できる。チェーホフの中には、憎むべき父親と尊敬すべき父親の、少なくとも2人が存在していた。このことは、チェーホフに人間の多面性を教えるきっかけとなった。また、一人の人間に対して様々な感情を抱くという精神体験は、人間の感情の多様性に気がつかせてくれたに違いない。

父親の職業も、チェーホフにとってはプラスに働いた。博識であった父アレクサンドルは、チェーホフに様々な学問への興味を目覚めさせ、諷刺画を描くプロセスを見せることで、デフォルメすることの大切さを教えた。演劇とは、虚構の世界である。舞台上では、全ての要素がつながり、波を作り、全体を一つの世界として創り上げる。チェーホフは、幼いころから様々な知識をインプットすることで、演技というアウトプットの方法に厚みを出し、一つのを強調しつつも全体の調和を崩さないというデフォルメの理論を学ぶことで、役のどの特徴を強調すれば良いのか、劇全体を通して、どのように演じれば役のイメージから逸脱しないのか、という演技方法を会得した。チェーホフ自身は無意識だったのだろうが、幼少期から、彼が演劇に必要な要素を身につけていったことは疑いない。

²⁴ Чехов, М.А. Жизнь и встречи // Чехов Михаил Александрович : Литературное наследие : В 2 т. М. Искусство. 1995. Т. 1.

4. おわりに

本稿では、先攻研究であまり触れられることのなかった、ミハイル・アレクサンドルヴィッチ・チェーホフの幼少期に焦点をあてた。俳優としてのチェーホフについては論じられてきているが、人物としてのチェーホフは研究者の間で、未だに共通したイメージが確立されていないといえる。しかし、先にも述べたとおり、俳優という職業が自身の精神と身体を素材・対象として成り立っている以上、舞台上だけでなく、幼少期も含めたその人の生涯を視野に入れながら論じることは肝要であるといえる。そのため、本稿ではチェーホフの両親、父アレクサンドル・チェーホフと母ナターリヤ・ゴリデンの人柄およびミハイル・チェーホフとの関係性について述べた。父アレクサンドルは自由奔放な人間であり、その両極端的な性格が息子ミハイルに与えた影響は大きい。チェーホフは、父の姿をとおして、人間には肯定的な面と否定的な面があること、一人の人間に対して矛盾する感情を持ち得ることを学んだ。また、父からは、実践的な俳優技術も多く学んだ。俳優に必要不可欠な様々な知識、特に学校では習わないような専門的な知識を学べたことは、後々の演劇活動に有用であったといえる。母ナターリヤからは、十分な愛情を受け育った。チェーホフが気難しいながらも、道をそれることなく育ったのはナターリヤの愛情ゆえであろう。また、ナターリヤは直接的でないにせよ、チェーホフの演劇活動を支え続けた。ナターリヤの助力なしに作られた役は一つとしてないと、チェーホフに言わせるほど、母ナターリヤの影響力は大きかった。つまり、チェーホフは、精神的な支えという根幹の部分では母ナターリヤに、演技方法という実践的な部分では父アレクサンドルに多くを負って生きてきたといえる。

このように、ミハイル・チェーホフは、無意識ながらも、幼少期より演劇に必要な多くの要素を身につけながら育った。これらの要素は、成長し、プロの俳優になった後もチェーホフの中で生き続けたと考えられる。今後の課題としては、幼少期からチェーホフが身につけていった、本質的および実践的な演劇的な要素が、舞台上でどのように表現されていたか、また、それらの要素が、チェーホフが晩年に構築したメソッドにどのように生かされているかを考察したい。チェーホフの師であるスタニスラフスキーは、俳優個人の中に存在する実存性、リアルさを重視した。スタニスラフスキーにとっては、“真実らしさ”が演劇に必要な不可欠な要素であり、俳優は自らの置かれた境遇(劇内の設定など)に共感し、その中で“生きる”ことこそが、演技であると定義づけている。チェーホフが自身の師のように考えていたのか、それとも、彼は彼で独自の演技観を持つようになったのか、そのあたりも今後、彼の舞台での演技、また晩年に執筆されたメソッドを分析することで明らかにしていきたい。

参考文献

- Бабочкин, Б.А. В театре и кино. Искусство. М. 1968.
- Бюклинг, Л. Михаил Чехов в западном театре и кино, С-П., Академический проект, 2000.
- Виноградская, И.Н. Жизнь и творчество К.С. Станиславского. М. ВТО. 1971.
- Громов, В.А. Михаил Чехов М. Искусство. 1970.
- Кнебель, М.О. Вся жизнь М. ВТО. 1967.
- Лидина, В. (ред.) Актеры и режиссеры / Сост. при участии С. Кара-Мурзы и Ю. Соболева. М. Современные проблемы. («Театральная Россия»). 1928.
- Чехов, М.А. Путь актера // Чехов Михаил Александрович : Литературное наследие : В 2 т. М. Искусство. 1995. Т. 1.
- Чехов, М.А. Жизнь и встречи // Чехов Михаил Александрович : Литературное наследие : В 2 т. М. Искусство. 1995. Т. 1.
- Black, L. C. (1987) *Mikhail Chekhov as actor, director, and teacher*, UMI Research Press, Michigan.